

社会的孤立と無業の相互依存性の学歴による差異

——東大社研パネル調査 (JLPS) データの分析 (6) ——

東京大学

石田賢示

1 目的

本研究の目的は、社会ネットワークからの孤立と無業状態の相互依存関係が存在するのか、またその関係性が学歴によって異なるのかを検証することである。社会ネットワークと就業機会の関連に着目した研究については一定の蓄積がある。しかし、両者の同時性を考慮しつつ動的な相互関係を検証する試みはまだ少ない。また、社会ネットワークからの孤立が個人の就業機会にとっていかなる意味を持つのかは、当の個人が置かれた社会経済的文脈にも依存するが、この点に関する実証研究の蓄積も薄い。本研究では、友人不在を社会ネットワークからの孤立の一つの指標とし、友人不在と無業の相互依存関係に学歴差がみられるのかについて、パネルデータを用いて検証してゆく。

2 方法

用いるデータは東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトによるパネル調査 (JLPS) データ (第1波~第11波) である。主要な変数は友人不在と無業を区別する二値変数であり、JLPSの友人満足感を尋ねる質問で「友人はいない」と回答する場合、友人不在であるとみなす。無業については調査時点の働き方に関する変数を用い、学生であるケースは分析から除いている。これら二つの変数を組み合わせた合成変数について多項ロジスティック回帰分析をおこない、一時点前の友人不在と無業のダミー変数を主要な説明変数として用いる。推定された係数から線形結合効果を求め、友人不在であると無業に、またその逆の関係が生じやすくなるのかを同時に検討する。加えて、主要な独立変数と学歴の交互作用項を用い、友人不在と無業の関係に学歴による差がみられるのかを検討する。分析は、男女それぞれについておこなう (配偶状況、単身世帯、主観的健康、暮らし向きが共変量)。

3 結果

分析の結果、学歴との交互作用効果を考慮しない場合、友人不在と無業の相互関係は認められなかった。しかし、学歴との交互作用項を認める場合、相対的に学歴が低い層で、友人不在であると無業になりやすく、無業であると友人不在になりやすくなるという悪循環関係が生じていた。以上の結果は男性についてみられたが、女性については「無業→友人不在」の関係 (主効果) が 10%水準の統計的有意性のもとでみられたにとどまった。

4 結論

学歴の高い者は労働市場において相対的に高い自律性を有しており、就業機会に対する社会ネットワークの影響は小さいのであると考えられる。一方、低学歴層では社会的孤立と無業の悪循環構造が生じており、社会ネットワークが職業キャリアにおけるセカンド・チャンス左右する要因の一つとなっている可能性が示されたといえる。女性について上記の傾向がみられなかったことについては、無業の意味が男性とは異なることが背景にあると思われるが、この点は今後の検討課題の一つである。

【謝辞】

本研究は、日本学術振興会 (JSPS) 科学研究費補助金・特別推進研究 (25000001, 18H05204)、基盤研究 (S) (18103003, 22223005) の助成を受けたものである。東京大学社会科学研究所 (東大社研) パネル調査の実施にあたっては、社会科学研究所研究資金、株式会社アウトソーシングからの奨学寄付金を受けた。パネル調査データの使用にあたっては東大社研パネル運営委員会の許可を受けた。